平新報

毎三回月五ノ日發行
編輯兼發行印刷人 山野邊庄吉
福島縣平町南町七五
發行所 平新報社
廣告料 五號十二字詰一行一回五十錢 掲載指定倍増
一部送料 定價金十錢

地方青年 女子團歌の振作を望む

勿來上

各地方に於ける青年及び女子青年團歌が公唱されてをる數は現在の所、僅かに七八縣に過ぎない。官公私立の學校に校歌ある如く其の府縣にも青年と女子青年團歌を急望することは、青年女子等の精神を振興するに最も重要な意義が含まれてをるのは言を俟たない。されば各府縣道に於ては青年、女子の團歌を大いに新作して其所より鄉土の文明意識を湧出し該訓練上に大なる美現を發揮されたく地方教育家、分けて青年女子指導者に留意されんことを希むで已まぬ。

此の意味に於て、予はこゝに福島縣の青年並に女子團歌を試作したのを次に一例として示して見よう。但し此の歌詞に對し今や作曲界の新人にして教育音樂の研究者、黑澤隆朝氏に依り作曲中なれば、乃ち此等二篇の伴奏附曲譜は福島の全縣下の若人達に高唱されること近きにあらむと思ふ。

福島縣青年團歌

（一）
荒浪吼ゆる、東の海邊
塩屋岬頭、萬里を照す。
磐梯山に、白雪清く
白虎隊こそ千古の譽れ。

（二）
櫻花散る、勿來の關や
秋風さむく、白河の關。
奥羽文化の、咽喉なりし
岩磐二州、歴史に誇る。

（三）
祖先を崇め、鄉土を愛し
國家を護る、正義の力。
是れぞ我等の、尊き使命
嗚呼榮光の、福島青年。

福島縣女子青年團歌

（一）
黑潮よする、東の海邊
塩屋岬に、燈臺紅し。
磐梯山に、白雪淨く、
白虎隊こそ、ほまれは高し

（二）
春は勿來に、散る花をしみ
秋白河に、月影めづる。
昔ゆかしき、武人だちの
かよひし跡もこゝに偲ばん

（三）
いざ立て女子よ懐しの鄉土
祖先の魂ぞ、土地を護らん
いざ立て女子よ御國を護り
わが福島の誇り頭に。

（堅・四・一・早稲田にて）

御殿橋開橋祝

大浦野里ケ浦龍宮の邊にて

芳秀院居士

謹啓今度磐城舞子發展の爲め有志の御援助を乞ふて御殿橋新設架橋工成て五月四日に開橋式を行ふ事となりまして其祝の作歌を致しました貴社に於て御添作の程御願致度餘り左に申上ました。

御殿橋

開橋祝

昭和四年天の高きとき肥たる馬の嘶く聲を聞き
時世新歩の要求に御殿保勝會を組織成し、磐城
御殿の御下屋敷と磐城舞子へ通ふ水路の船を橋
に變更の計劃に消防組員の協賛あるや滿場異口
同音に公共の便益を量る尺度の構成に躊躇は禁物なりと一瀉千里の勢に此議を確定し其の名を御殿橋と命名し緊縮を確守し越て昭和五年花の月有志諸彦の援助を仰ぎ保勝會員勞を厭はず資を投じ緊縮より發展へ難を遠け新設架橋工成り落成の今日の佳辰の式日に三夫婦揃ふて最も目出度や渡り始め、是より地方や磐城舞子發展期せずして日に月に年を重ねて千代に八千代に八重の汐路や虚空の厭ひなく悦び勇て舞ひ進む

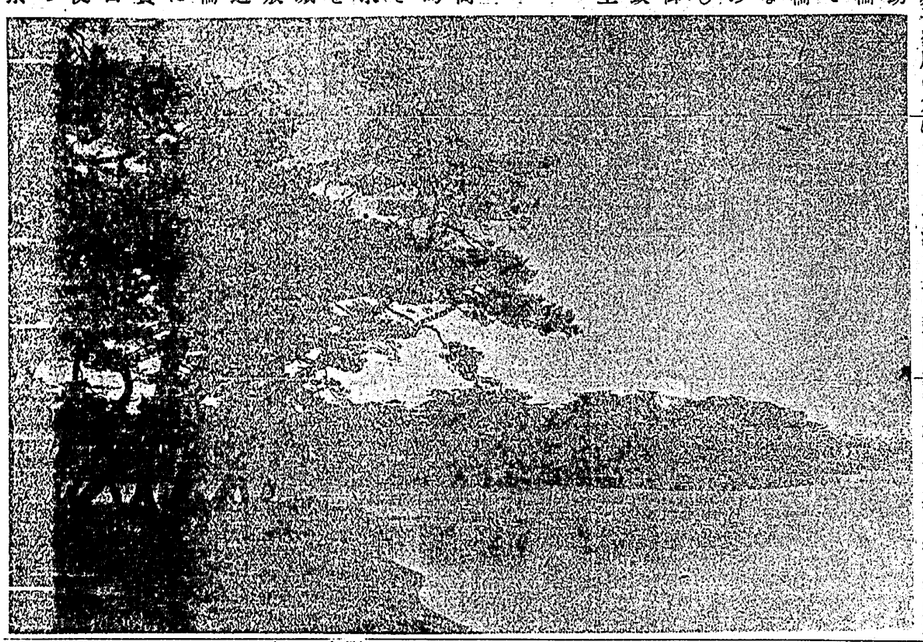
聖上陛下　萬歳皇國萬歳
有志諸彦萬歳御殿保勝會萬歳磐城舞子萬歳萬々歳と足並手拍子揃ひて萬々歳と舞ひ祝ふ。

御下屋敷の御殿橋渡りや磐城舞子の高砂で主と二人で黑き尉と白き尉との舞ひ遊び

御下屋敷の御殿橋渡りや磐城舞子の高砂で主と二人で尉と姥

祝磐中創立三十五年

高久村役場助役　本馬武
好間村町田　神谷米店　神谷兼次郎
小搔槌小路　乾書店



樺太行の途上

青森にて

會津若松太田生

拜啓　毎度平新報御送附に相成難有拜見致居候小生今度商用にて樺太へ渡島の途遇々寸暇を得て沿道風景春光麗なるを眺望すれば此の儘行過ぎるも惜き事と思ひ御紹介まで御笑讀被下度候

去る十五日午前十時櫻花滿開の飯盛瀧澤の山々を雨煙る中に發車なし野良にはたらく村孃野夫の姿も面白く鹽川喜多方山都など田舍の驛には半開の櫻花に浮かゝ人も世は揚げて節約緊縮の時代を自覺せしや醉漢も目に付かず

德澤豐實　驛間は福島新潟の縣の境界線此の邊は阿賀川の激流岩を「カミ」「タン」を爲す實に變化極まりなく、青葉の頃又は秋思ひやられる風景にして日比谷鹿の瀬の兩驛間には東信電氣會社の發電所近代科學の力を應用しタム式發電所の工事又其電力を應用して人造肥料工場の建築等近代科學の發展は我等凡俗の海想像及ばず然も一方には天然の美を破壞する惜む汽車は阿賀川の沿岸を走り越後平野に入れり

新津驛　信越羽越磐越の各線の分岐點又石油の產出地として有名なり。此の邊り畑と云はず野と云はず石油堀の櫓の林立は奇觀なり越後平野の盡きる

村上驛　より汽車は海岸線を走る、其途中小作爭雄議に有名なりし木崎村は國木田驛に近く又乙村の大日の紅葉春秋の眺も如何かと

笹川流　の景は桑川驛の近くにあり眺望の雄大粟生島は呼べば答えん間近に横たわる漁村の驛を幾つかを通過して溫海驛に着し此所は溫泉場として又夏は海水浴場として北越方面や地方人士の遊樂地湯の町の

溫海　は戶數貳百餘軒して米產地奥羽線と合する所市内の繁榮なる新潟青森等宿泊せし事や地方の名所舊蹟名物等は又寸暇を得たる時稿を改めて御知らせする事とする。

是れは青森驛迄のあらきしに候

北海道は樺太へ上陸の上、御知らせ可申上樺太上陸後は樺太西海岸眞岡町南濱町二ノ二十一九會佐藤重衛方に五月中旬頃迄滯在の豫定なれば何れ樺太の事は委細處御通信可致候也

如來は北陸地方人の佛敎の信仰に依て賑ふ北越の海岸線には

笹川流　の景は桑川驛の近くにあり眺望の雄大粟生島は呼べば答えん間近に横たわる漁村の驛を幾つかを通過して溫海驛に着し此所は溫泉場として又夏は海水浴場として北越方面や地方人士の遊樂地湯の町の

溫海　は戶數貳百餘軒して米產地奥羽線と合する所市内の繁榮なる新潟青森等宿泊せし事や地方の名所舊蹟名物等は又寸暇を得たる時稿を改めて御知らせする事とする。

是れは青森驛迄のあらきしに候

北海道は樺太へ上陸の上、御知らせ可申上樺太上陸後は樺太西海岸眞岡町南濱町二ノ二十一九會佐藤重衛方に五月中旬頃迄滯在の豫定なれば何れ樺太の事は委細處御通信可致候也

優勝聞き込み

川前村の同窓

佐藤三郎

毎々母校の爲め御努力被下有難奉深謝候

本村は石城の西北隅山缶重疊なる僻村にして磐城の北海道のネックネームあり隨つて教育の程度も遲々として不進申以上の教育を受けしものも少なく母校卒業生としては

第一回永山德一、第四回佐藤三郎第二十五回永山條介第二十六回佐藤董一郎此の二組父子の外に矢内忠一第八回仙臺高工卒日立鑛山勤務中死亡永山保夫第二十五回國學院大學在學佐藤定翁第二十九回昨年の卒業是は小生の分家の嗣子なり。

以上七名にて目下在學ものもなし、村内にて中學卒業者は他中學を通じ小生等の外に石川中學三名三春中學二名卒業石川一名三春二名在學に有之候

磐中同窓會員名

岩手支部會員名

岩手市を中心とする磐中同窓會友は去る十一日紀元節の日森岡市に會合懇親會を催したと、同地方の會員左の如く

岩手縣師範學校教諭　盛岡市上田市營住宅　石城郡内郷村野木　草野五郎（六）
醬油釀造業　古館野村助役　柴波郡古館村　同上遠野（櫛田）樺澤季吉（八）
沼宮内營林署　沼宮内町同勿來町秋本左右次（10）
釜石病院　同上小川吉田至孝（三）
日立鑛山製煉課　岩手輕鐵岩根橋驛前出張
中山嘉一郎（三）
岩手縣廳農務課　盛岡市下橋官舍小野新町伊藤正（三）
盛岡中學校教諭　市内下臺市營住宅　石城郡磐崎村藤原　高木稻水（六）
岩手縣廳農務課　市内仁王小路四七　同草野村猪狩仁三（九）
家業　稗貫郡八重畑村新田目盛（三）
水澤商業學校教諭　水澤町同上小川村柴崎弘平（三五）
盛岡高等農林學校林學科市内新山小路根守方　同好間村　薗部正敏（三四）
岩手醫學專門學校　市内内加賀野土高橋方　同草野村新妻司郎（三六）
同　同平南町松村亨（同）
同　同雫石營林署　同永戸村　松崎乙彦（三七）
舊職員
一關中學校教諭　熱海敏雄
市内仙北組長　木村四郎
水澤高等女學校教諭　春日佐幸

最近上級校

四年より進めるもの一高のみに二名あり他校にもあり本年度は優秀

昭和五年度上級學校入學者一覽

東京高等師範學校30成田末太郎29菅野一
海軍兵學校　四年菅波政雄
第一高等學校　四年佐藤正30猪狩良彦　四年荒川健郎28鈴本榮二　28石坂恒雄
水戸高等學校　30吉田孟30有馬公男　30杉山慈郎29水野忠誠
弘前高等學校　四年鈴木興信30作山道男
高知高等學校　30長瀨晴雄
北海道帝大豫科　29折笠彰
東京商科大學專門部　29高木十郎29渡邊金一郎
福島高等商業學校　29吉川善市
横濱高等商業學校　29東條光雄29西尾邦明29吉川善市
小樽高等商業學校　29高木十郎29渡邊金一郎
東京高等工藝學校　30門井靜志
仙臺高等工業學校　30根本和平29上坂正勝29鈴木千里29畑基29箱崎安
京都高等工藝學校　29木村五郎
山梨高等工業學校　29畑基
南滿州專門學校　29鈴木昇
東京高等商船學校　30磯上善春30船生保男
早稲田大學高等學院　29松崎英29塩正
應慶大學豫科　四年坂本威雄30櫛田敏也39柏原英夫27秋山將義
明治大學豫科　四年江尻翠30岡山武29松崎英二
慈惠院醫科大學豫科　28根本弘
日本大學齒科　30福尾利清27佐藤龜次郎
同高等師範部　27草野求
國學院大學　30小林正義
東洋大學　30吉田英政
法政大學　28菅波三郎
東京農業大學　29鶴新兵衛
日本齒科醫學專門學校　30松田清
東京醫學專門學校　29重田景次
明治藥學專門學校　29古市壽平
岩手醫學專門學校　29船田義孝29箱崎精史
國士館專門學校　30小野彌
東京高等蠶業學校　29鈴木美術學校　26吉田富美
豐島師範二部　30小松周一
29佐川彦兵衛
29鈴木喜平
青山師範二部　29西尾邦明
茨城師範二部　30宮本義門
29大和田政明
29水野昇平
本縣師範二部　30中根武夫
小濱常晴　浦山貞一　佐藤衛生課長に榮轉現住所左の一郎　廣川登志雄　橋本正如
本郷區湯島三組町四八
神谷晨　金成兵司　小野幸一29金子德太郎　大和田一美25秋元孝亮
福島農業補習學校教員養成所27伊藤伊佐治
「四月廿九日迄判明の分」

◇酒井菊雄氏（12）醫學博士の氏は東京衛生試驗所より今回保健局

五月八日平潟海岸八幡社内靜海亭にて東都佐瀨劍珍坊氏參られ川柳會合があります。

題「舟」「鳩」

各句五句限り（以内）

五月五日〆切

出句所平一丁目平吟社

綿引氏宛

出鄉の前夜

西山孝頼

孝……孝……何時も口喧しい父の聲も今夜に限つて何んとなく優しく低かつた。私も奥で故鄉を出る明日の支度をして居たが「パイ」と答へてすぐ立上つた。父は今一度孝と言つてしみ〳〵と私の顔を眺めさうして靜かに口を開いた、お前も愈々一人前の商人になる事を蔭ながら祈つてゐると言つた。その時心の中できつと立流ならないよ。石岡へ行けば田舍と違つて色々精神的苦痛や肉體的の疲勞を眞に味はふ事が、それが奉公だから我慢して一心不亂にはたらいて辛抱しなければいけないよと云つて、再び私をながめた。私の眼は次第々々に涙が浮び頬を流れて頭へてすぐ立上つた。父は今を深くうなだれた。父は尙言葉を續け孝が立流な一人前の商人になる事を蔭ながら祈つてゐると言つた。その時心の中できつと立流な

問人になりますと固く誓つた。母は尙物忙しげに明日の支度に餘念がなかつた。

祝磐城中學校創立三十五年

第廿八回卒業
平二丁目　坂田金物店　坂田千平
平四丁目　鶴屋洋品店　猪狩庄一郎
平五丁目　吉田鐵工場　吉田豐
平新川町　風間泰介

第廿九回卒業
常磐屋時計店　松本建次
平一丁目
太丸屋荒物店　大津賀幸平
平町三丁目
平田町　高久病院　高久孝
平四丁目　會田時計店　會田清明
平新川町　松崎英二

平新川町　大室屋　松崎長次右門

第三回卒業
清水醫院長（平町驛前）　清水廣政

第四回卒業
内郷村磐城炭礦病院　大瀧正晴

第五回卒業
平町材木町　草野順平

第七回卒業
湯本町驛前　育文堂書店　齊藤長林
大浦村小學校長　柴田正則

第九回卒業
銘酒「白馬の雪」釀造　松本德一
平窪村

第十一回卒業
小名濱町助役　高木保

第十二回卒業
平町水道部水質試驗所　松井深

第十三回卒業
大正洋瓦工業社長　根本毅一
平町鎌田町

第十四回卒業
江名町會議員　吉田正雄

第十六回卒業
植田運送會社　小野保

第十八回卒業
渡邊內科醫院長　渡邊久
平町ネズミ坂

第廿四回卒業
新潟高等學校　前澤正
平町搔槌小路

創立參拾五年を迎ひて
磐城中學校開校紀念日なる本日午前八時祝典擧行と共に若葉薫る高月臺上に紀念大運動會
同校の沿革と現在の概要

平町高月臺在福島縣立磐城中學校は明治二十九年の創立本年を以つて開校三十五年と成り同校卒業生を以つて成る同窓會主となり開校日たる本五日午前八時より母校に於てそれが祝典を擧行し、同校では第三十二回紀念大運動會を開催する事になつて居る。「但し雨天順延」同窓會では緊縮の折柄であるがこの祝典を意義あらしむるため左の件を奉什する。

一、母校勤續拾年以上の職員に感謝狀と紀念品を贈呈

一、職員氏名略歴は別記の如く校長は歴代とした。

「勤續職員名略歴別項掲載の通り」

一、紀念大運動會に生徒一同に紀念品「手拭一本づつ」及び優勝賞品贈呈

一、同窓會員名簿作成に功ある新田目春松、廣田德行兩評議員に紀念品及び感謝狀贈呈

因みに同校の沿革を記するに左の如くである。

同校は明治二十八年十月三十日福島縣尋常中學校磐城分校として舊菊田藩前、石城全町村組合から設立願があつて同年十一月十六日認可になり二十九年四月五日に開校同五月五日縣吏員等の臨席の下に開校式が催されたといふ。

故に同校の開校記念日はこの五月五日となつて居る……次いで三十一年四月一日分校を更めて第二尋常中學校となり、三十二年四月尋常の二字をとり三十四年四月福島縣磐城中學校と、引いて同年同月二十七日現在の「立」となつたのである。

校舍敷地は平町揚土壇に校舍は大正十二年三月三十一日迄で同年四月一日より現在の高月臺に移つたのである。

生徒の數を見るに明治二十九年開校當時に百十六人の入學を許し三十四年卒業生第一回四十三名を出した。三十四年四月在校生總數四百五十二人四十五年四月一日には五百二十一人、大正十一年四月一日には八百七十八人五年四月一日壹千五十四人の二十二學級職員數三十五人昭和三年四月は壹千百拾貳名の二十四學級職員數四十一名（うち配屬將校を合せて）現在は生徒數壹千參拾八名學級數三十五學級本年現在は生徒數千百五十八名學級二十五學級職員數四十二名かくの如く校舍と申し設備と申し東北切つての最大中學と稱されて居る

其間の歴代校長は

△故植竹源太郎氏開校當時より明治四十四年三月迄

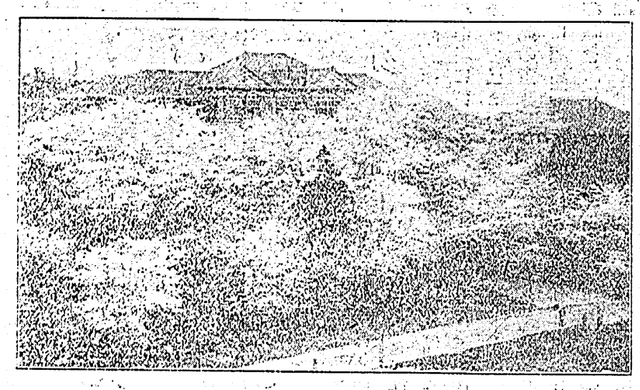
△故西村岸太郎氏大正三年九月迄

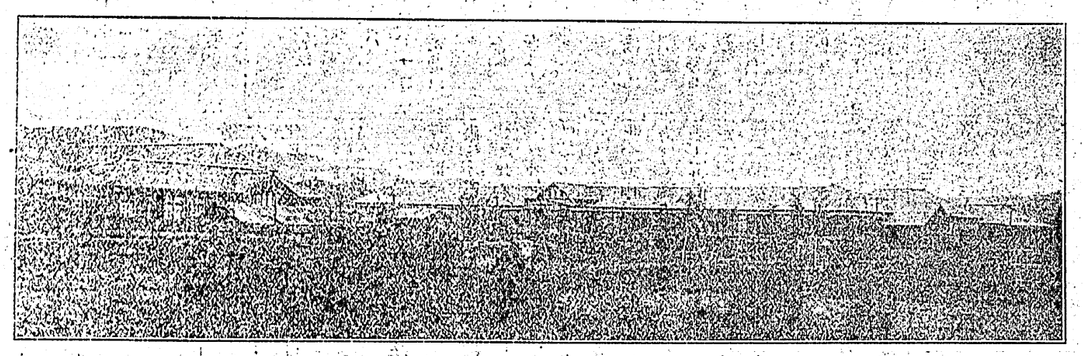
△故桐谷文平氏大正十年三月迄

△故滑川一郎氏大正十五年十二月十二日迄

△山崎光雄氏、滑川氏現職のまゝ死亡により大正十五年十二月十三日より昭和二年三月十九日迄校長事務取扱

△唐土齊治氏　昭和二年三月二十日田村中學校長より就任現在に至る。





◎寫眞說明「校長と校舍」

□校長向つて「右上」故植竹源太郎氏「下」故西村岸太郎氏「中」故桐谷文平氏「左上」故滑川一郎氏「下」現校長唐土齊治氏

□校舍「上」思出多き揚土壇の元校舍「下」輪奐たる美觀を呈する高月臺上の現校舍

磐中同窓會代々の役員

磐城中學校の沿革と現在の概要は別記載の如くであるが其校卒業生を以つてなる同窓會の模樣を見るに本年三月第三十回迄の卒業生總人員貳千六百三十一名うち死亡會員二百九十名にして二千三百四十一名の會員があつて毎年八月十日午後一時より同校に於て例會終了後懇親會を催し母校及び會員に事件出來や其他にはそれ／＼適宜の處置をなし新年宴は一月三日夜開催相互の親睦を計つて居る現在役員の任期は二ヶ年であるが今代々の役員を調ぶるに左の如くである。

大正元年は明治天皇諒闇中廢催を遠慮せりと

○第一回（明治卅四年八月）
會長金古久次、幹事森田一郎「在校五年生」

○第二回（三十五年）
會長四條七十郎、幹事花澤甫愛、波多野通聖

○第三回（三十六年）
會長比佐昌平、副會長加同時に評議員を設け山崎清三、清水廣政、草野順平、阿部政右衛門、加藤丈夫その後引いて毎年開會せるも集會員尠く選擧をなさず

○大正十五年八月改選
會長白井一郎、副會長は二名として仲里文平、三森虎雄、幹事遠藤俊一郎、關内正一、諸橋元三郎、青天目增藏、木村守江選ばれ庶務關内正一會計は諸橋元三郎

○昭和三年八月十日改選の結果現在に至つて居る即ち副會長二名の所一名とし幹事五名の所三名增加し八名

○第四回（三十七年）
會長栗原一郎、副會長山下健爾、幹事夏井要次郎、鈴木芳之助

○第五回（三十八年）
會長堀尾成章、副會長松本政勝、幹事山部正勇、西村東太

○第六回（三十九年）
會長八木澤文吾、副會長北郷博、幹事佐藤順平（改姓草野）新田目春松

○第七回（四十年）
會長吉田哲五郎、副會長高荻桂次郎、幹事松崎林八、阿部政右衛門、三瓶信一、比佐義勇

○第八回（四十一年）
會長山崎宣吉、副會長清水廣政、幹事加藤丈夫、諸橋嘉吉、梅原幸助

○第九回（四十二年）
會長廣田德行、副會長新田目春松、幹事白井一郎、小齋良、高荻實

○第十回（四十三年）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事渡邊保皓、久野二郎、安島久

○第十一回（四十四年）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事渡邊保皓、新宮健雄、柴田德二

○第十二回（大正二年八月）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事山崎宣吉、松崎憲司、柴田德二
これより任期を二ヶ年とす

○第十三回（四年八月）
會長加藤丈夫、副會長阿部政右衛門、幹事濱島操、山崎宣吉、佐藤寅吉

○第十四回（六年八月）
會長山崎清三、副會長新田目春松、幹事柴田德二、長瀨齋一、佐藤虎吉

○第十五回（八年八月）
會長新田目春松、副會長柴田德二、幹事長瀨齋一、根本毅一、石川友次郎

○十年再選

○十二年
會長新田目春松、副會長非上貞治郎、幹事根本毅一、石川友次郎、酒井清、永山勇吉、藤田榮助

○十年再選
會長比佐昌平、副會長加藤丈夫、幹事諸橋元三郎、阿部政右衛門、草野順平、三森虎雄、清水廣政、諸橋元三郎、木村守江

會長　諸橋守次氏

會長諸橋守次、副會長酒井清、常任幹事關内正一、山田盤麿、山野邊庄吉、幹事松本榮一、小野信一郎、蛭田利光、阿部傳六、鈴木信雄

尙ほ評議員從前の通り山崎清三、新田目春松、山崎宣吉、清水廣政、加藤丈夫、廣田德行、草野順平、阿部政右衛門

祝磐城中學校創立三十五年記念

磐城中學校
同教頭
唐土齊治

外職員交誼會員一同
山崎光雄

酒井醫院
酒井國三郎

平町南町
平賀仙三郎

第一回卒業

高久村
醫師
鈴木榮吉郎

草野村
渡邊重彌

第二回卒業

平町手搦町
佐藤要一郎

湯本町
吉田金作

第三回卒業

平町八幡小路
日本郵船會社船長
代議士
比佐昌平

平町新川町
木村外科病院長
木村寅次郎

平在郷軍人分會長
山崎合名會社
山崎清三

第四回卒業

川前村長
佐藤三郎

草野村
片寄庄五郎

湯本町
磐城炭礦社員
箱崎清一

平町番匠町
堀江正茂

第五回卒業

豐間村小學校
四家清次

平町磐城高等女學校
山部正勇

湯本町入山炭礦社員
蛭田富太郎

第六回卒業

四倉町
門馬醫院長
門馬倉次郎

錦村
植田無盡會社
大平菊次郎

內郷村會議員
磐城劍道會長
加藤丈夫

第七回卒業

磐崎村西郷
玉川小學校長
杉山勇馬

平町四丁目
佐藤齒科醫院長
佐藤武之

湯本町
町會議員
比佐源造

湯本町
湯本小學校長
篠原保治

平町南町
織田齒科醫院長
織田豐太郎

平撥槌小路
阿部政右衛門

平町紺屋町
白井一郎

第八回卒業

平町三丁目　米穀商
梅原利三郎

平町鍛冶町
平町會議員
國府田直良

第九回卒業

平町南町
福島民報平支局長
山田盤麿

內郷第二小學校長
堀一郎

第十回卒業

泉村
佐々木齒科醫院長
佐々木三郎

平町北白銀町
鈴木孝

好間小學校
鈴木榮治

平町鎌田町
金成醫院長
金成忠義

內郷村高坂
土木請負業
大友寅吉

平町撥槌小路
常磐銀行四倉支店長
松本健

平町三丁目
龜田屋吳服店
三森虎雄

高久村
高久小學校長
鈴木龜之助

第十一回卒業

飯野小學校
猪狩忠光

平町五丁目
井上貞治郎

平町三丁目
中野吳服店
松本榮一

平町四丁目
マルトモ柴田書店
柴田德二

好間村古河炭礦々業所
川島忠通

平町田町
明雲堂眼科醫院
新妻孝之助

福島市
縣廳縣視學教育課
渡邊壽重

湯本町　運送會社
鯨岡賢司

江名町中ノ作
ヤマト醬油株式會社
遠藤俊一郎

第十二回卒業

平町田町
野崎自動車部
野崎喜八郎

平町田町
住吉屋支店
酒井清

湯本町
入山採炭會社
若松修一

內郷村磐城炭礦勞務課長
筒井磐雄

平第三小學校
訓導
野木繁彌

平町三丁目
中野吳服店
中野康平

第十三回卒業

平町南町
大和田耳鼻咽喉科醫院長
大和田郡司

四ッ倉町驛前
酒井善吉

湯本町　山形屋旅館
鈴木康平

第十四回卒業

平町田町
藤田女學校長
藤田榮助

夏井村管波
箱崎義範

第十五回卒業

鹿島村字下藏持
三島五一郎

福島市　藤本ビルブロードカー銀行福島支店
佐藤一郎

平窪村幕ノ內
吉田憲英

平町四丁目　伊勢屋
阿部岩次

平町田町
銘酒「由良乃助」販賣
永山勇吉

磐中拾年以上勤續にして同窓會より感謝さる諸先生

山崎宣吉 先生
福島縣石城郡內郷村大字綴出身
磐城中學校第二回卒業
國學院大學卒業
明治三十八年十月十九日
岩手縣立福岡中學校教諭拜命　明治三十九年一月十日
福島縣立磐城中學校教諭
大正八年三月三十一日大阪府立天王寺中學校教諭
大正八年四月二十二日岩手縣立盛岡中學校教諭拜命
正九年十月十五日宮城縣大立仙臺第一中學校教諭拜命
大正十二年九月十四日福島縣立磐城中學校教諭拜命

遠藤平太 先生
山形縣西田川郡鶴岡町最上町出身　明治卅七年三月一日文部省中等教員檢定試驗ニ合格
明治卅七八年役ニ從軍
明治四十年四月廿五日福島縣立磐城中學校教諭拜命

小野寛美 先生
福島縣石城郡飯野村大字小泉出身　明治三十九年十二月廿四日　日本體育會體操學校高等科卒業
明治四十二年三月卅一日群馬縣立前橋中學校利根分校教諭拜命
明治四十五年三月卅一日群馬縣立沼田中學校教諭拜命
大正三年三月九日　群馬縣立前橋中學校教諭拜命
大正八年十月廿五日　福井縣立武生中學校教諭拜命
大正十年一月廿六日　福島縣立磐城中學校教諭拜命

廣田德行 先生
福島縣平町仲間町
明治三十六年三月三十一日磐城中學校卒業
明治四十年七月國學院大學卒業
明治四十五年福島縣立磐城高等女學校教諭拜命
大正八年四月三十日　福島縣立磐城中學校教諭拜命
明治四十四年二月八日砲兵少尉
大正三年四月一日岩手縣立一關中學校
大正七年六月十七日福井縣立敦賀商業學校教諭拜命
大正八年五月十二日　福島縣立磐城中學校教諭拜命

橋本芳太郎 先生
茨城縣多賀郡櫛形村大字伊師本郷三十四番地出身
明治三十八年郁文館中學校卒業　明治四十一年正則英語學校高等科卒業
明治三十七年講道館入門
明治四十四年二月八日

近藤廣記 先生
福島縣石城郡鹿島村大字上藏持字江名口六二番地出身
大正三年三月卅日
福島師範學校卒業
大正八年三月廿四日
東京美術學校卒業
大正八年三月卅一日　富山縣立富山中學校教諭拜命
大正九年三月卅一日　福島縣立磐城中學校教諭拜命

山名隆貞 先生
福島縣石城郡夏井村大字菅波字宮前二六番地出身
明治三十七年三月三十一日磐城中學校卒業
明治四十年七月七日
國學院大學卒業
明治四十二年四月三十日千葉縣立成東中學校
明治四十四年五月八日任陸軍歩兵少尉
大正三年九月八日國學院大學學生生徒監拜命
大正七年二月十四日國學院大學學務課主任拜命
大正八年一月十日別格官幣社東照宮禰宜拜命
大正九年四月廿四日　福島縣立磐城中學校教諭拜命

大橋秀冬 先生
福島縣石城郡泉村大字泉字泉二一四番地出身
明治四十一年四月七日福島縣立工業學校卒業
大正四年七月十日　京都高等工藝學校色染科卒業
大正四年十一月廿八日日本化學工業株式會社技手拜命
大正六年四年二日　福島縣立磐城中學校教諭拜命

中柴光顯 先生（舊姓　堤）
福島縣平町字仲間町二〇番地出身明治二十三年三月十五日　平英學校卒業
明治三十八年四月廿七日小學校教員檢定試驗合格
明治卅四年五月廿三日　福島縣立相馬中學校教員拜命
明治卅七年十月五日　福島縣私立磐城女學校教員拜命
大正三年三月卅一日　福島縣立磐城中學校教諭拜命

山本良作 先生
福島縣河沼郡野澤町字原町二二四二番地出身
明治廿五年三月廿八日福島師範學校卒業
明治卅八年六月十四日文部省檢定試驗合格
明治卅二年四月十日　福島縣立會津中學校教諭拜命
明治四十二年三月六日福島縣立會津高等女學校教諭拜命
大正六年五月十八日　福島縣立磐城中學校教諭拜命

紺野勝治 先生
福島縣平町字二丁目二十六番地出身
大正八年四月三十日　福島縣立磐城中學校書記拜命

酒井國三郎 先生
福島縣石城郡草野村大字泉崎字砂田四七番地出身
明治廿三年十二月廿日　第二高等中學校醫學部卒業
明治卅四年三月五日　福島縣立磐城中學校々醫囑託

特別感謝をうくる 磐中同窓會の功勞者 新田目春松氏

卅五年式典に際し今回磐中續いて目下同銀の保險部に同窓會より廣田德行氏と共活躍されて居る。氏は世人衆知の如く辯護士新田目善次郎氏の令弟にして天保錢主義者である。左に氏の主義宣傳文を掲して敬意を表する。

處世法乃秘訣 天保錢主義宣傳

天保錢ノ形ハ四角ノ圭角ノ取レタルナリ
四角トハ正シク將又凡帳面ノ謂ヒ圭角ノ取レタルハ圓滑ノ謂ヒナリ
吾人ハ社會ニ處スルニ當リ自ラ何事モ正シク凡帳面ニ將又角ガ取レテ圓滑ナルニ在リ
是ヲ處世法ノ秘訣ト言フ
中卒後早大商科を出で磐炭に多年勤めて居つたが怪我のため退職常磐銀行に入り員に記せる如く數年會長の席に在り、其期は移轉新築問題の當時であり母校のため會友後輩の指導世話役として會としてなくてならぬ親切圓滿をモットーとする樂天家の士である。氏は磐城中學校卒業生である。

繪畫X會と

郡下兒童作品展覽會

本五日磐中創立三十五週年紀念式典並に紀念大運動會開催と同時に同校舍内にて第三十四回X會展覽會並に郡下小學校兒童作品展覽會が催される。

短歌　佐藤清長

雜詠

有明の隅なき空に精靈の舞ふとし思ひり白鳩の群

ポツカリと何考ふるにはなけれども ふいの餘韻の流れ勝るに

祝磐城中學校創立三十五年記念

中村政 平商業學校
平町南町　上田外科醫院

上田耕作

第十六回卒業

森合芳男 植田町　森合齒科醫院長

長瀨元治郎 東京府下上大崎町二四九

山野邊久利 平町仲町　山野邊米店

諸橋元三郎 平町五丁目　釜屋商店

志賀與市 平町五丁目　志賀齒科醫院長

新妻恭孝 草野郵便局長

粟野良平 湯本町　四倉町　磐城セメント會社

鯨岡潔 郵便局長

比佐榮一 湯本町　松柏館

小泉恭平 磐崎村在鄕軍人分會長

大越新 湯本町入山採炭會社

第十七回卒業

鯨岡久一郎 湯本町

高野益造 助役　栃木縣眞岡線市塙驛

關內正一 平町二丁目　平町會議員

草野鷹次 大野村玉山

前田清美 植田町　前田醫院長

青天目增藏 平町紺屋町　住吉屋本店

御代德次 磐崎村岩ヶ岡　酒造業

蛭田利光 平町二丁目　常磐銀行平支店

井坂久吉 湯本町　入山病院

原精一 平土橋通　原齒科醫院長

第十八回卒業

日野良太郎 平町材木町　柏屋染物店

鵜沼龍太郎 青森市安六町二〇八　平町磐城高等女學校

阿部傳六 柏屋染物店

大谷武雄 平町搔揶小路　大谷酒店

第十九回卒業

村松義節 植田町　磐東銀行取締役

伏見文彥 平白銀町　福島縣農工銀行平支店

木村守江 大浦村　醫師

山崎忠二 平町磐城高等女學校

柴田祥平 內郷村

鈴木良平 平町北目町

樫村末吉 平町胡麻澤　赤井小學校

渡邊久男 內郷村　平區裁判所書記

高木一 植田町　常磐銀行植田支店

木村進一 湯本町　木村醬油店

高木忠三郎 平町南町　マルミヤ商店

第二十回卒業

齋藤晃 玉川村　立憲養正會磐城支部長

大竹久太郎 平五丁目　大竹酒店

武川信夫 平商業學校

鈴木信雄 平町田町　水道部

新妻武義 大浦村小學校

第廿一回卒業

鈴木一男 上小川村

矢吹盛保 夏井村荒田ノ目

石坂一雄 平田町　石坂代書事務所

志賀信雄 平白銀町　志賀米店

菅波勇 四倉町　菅波齒科醫院長

第廿二回卒業

藁谷久太郎 高久村

大須賀百世 平町第二小學校

山崎元三郎 平南町　山宗酒店

第廿三回卒業

中山秀雄 江名町中ノ作

爪田壽 平町第一小學校

中野勇雄 平町二丁目　中野洋品店

第廿四回卒業

草野壽男 大野村玉山　東京府下岩淵町稻付八〇　須藤省三方

草野又次郎 大野村玉山

石井金重郎 酒造業

水竹仁 平町第一小學校

諸橋敬一郎 平大町

第廿五回卒業

鈴木昂 平研町　鈴木眼科醫院

志賀遠平 平町第一小學校

三井賢夫 平町二丁目　三井履物店

小宅嘉一 植田町　小宅商店

佐藤榮治 平六丁目

第廿六回卒業

藤田力 平町田町　平第一小學校

三井五郎 平四丁目　日本大學齒科醫專

第廿七回卒業

志賀昇 飯野小學校　平四丁目十一や

小島一郎 平田町　一の井

菊地重雄 平一丁目　常磐屋時計店

松本孝太郎

關內忠助 平四丁目　關內藥店

加藤利貞 平町北目町

第廿八回卒業

佐藤董一郎 川前村

鈴木新右衛門 平二丁目　西村屋藥舗

山崎修三 平二丁目　紙屋吳服店

同窓會より供物を贈らる 物故せる歷代校長

故西村岸太郎氏
山形縣山形市七日町出身
明治卅五年七月十一日東京帝國大學物理學科卒業
廣島第四中學校
安積中學校に歷任
明治四十四年三月三十一日福島縣立磐城中學校長ニ補セラル
大正三年九月　福島中學校長ニ轉補　後退職死亡

故滑川一郎氏
茨城縣多賀郡華川村出身
明治卅一年三月三十日東京府師範學校卒業
明治卅七年三月卅一日東京高等師範學校卒業
滋賀縣師範學校　仙臺第二中學校　群馬縣第二師範學校　北海道師範學校
相馬中學校長ヲ歷任シ
大正十年三月卅一日磐城中學校長ニ就任
大正十五年十二月十三日在職中死亡

故植竹源太郎氏
明治三十一年四月一日磐城中學校長ニ就任
大正三年退職
昭和二年正月死亡

故桐谷文平氏
明治二年六月十七日千葉縣長生郡西村大字水沼生れの行年六十歲、二十年千葉中學校を卒業して上京、二十六年法學院を卒業伊豫の松山中學校を振り出しに、群馬縣安中中學校教諭から福島中學校長に更に大正三年九月五日西村岸太郎氏の後任として磐城中學校に轉じ大正拾年三月末日迄在校、引いて本縣社會課の新設さるゝや同課長主事となり病氣のために十三年退職、平町胡麻澤に靜養中平禁酒會長、石城兒童研究會長、又は共濟會長、平興國會長等の職に在り良く社會公益事業のため直接關接力められ平十三日會の如きも氏の創設に成つたものである又日露の役に出征せる事あり、陸軍歩兵中尉、從六位勳五等功五級である。死亡昭和三年十月五日

同窓會より供物を呈さる 最近物故せる磐中舊職員

故奧山厂藏氏
山形縣北村山郡東郷村大字沼澤出身
明治三十四年四月十三日磐城中學校教諭拜命
大正二年二月十八日在職中死亡

故森合仙太郎氏
福島縣岩瀨郡仁井田村大字館ヶ岡出身
明治四十年十二月五日文部省圖書科檢定試驗合格
明治四十一年一月十四日安積中學校教諭拜命
大正元年八月十三日磐城中學校教諭拜命

故關口彌作氏
秋田縣平鹿郡角間川町三十番地出身
明治卅一年三月廿日第一高等學校物理學助教拜命第二臨時教員養成所講師
明治卅七年三月卅一日東京高等師範學校卒業
明治三十一年四月一日磐城中學校長ニ就任
大正十二年十三日在職中死亡

故中根松次郎氏
愛知縣額田郡常磐村大字瀧村五一出身
明治四十年十二月五日文部中等教員物理科檢定試驗ニ合格
明治卅二年四月九日　千葉縣佐倉中學校教員拜命
岡山縣津山中學校東京高等師範學校等ニ歷任
明治四十一年十一月十二日磐城中學校教諭拜命
昭和二年三月在職中死亡

淨土宗大學講師
奉天清國政府師範學堂教授等ヲ歷任シ
大正九年八月卅日　福島縣立磐城中學校教諭拜命
大正十五年四月二日在職中死亡

故中根松次郎氏

信仰の人々へ（17）

迷信

七

片岡鎌三郎

正しく信仰にはいつて初めて正教を知り迷信の愚を悟り得るのである、其の正しい信仰に不惜身命の信念力により世魔を制服せしむるものが、自己を救ひ他人を益せしむる道である。夫れによつてのみ迷信打破も出來るのである、左もなくんば迷信は容易に打破出來るものでない。只口に迷信打破と云ふ何の益もないのである、打破出來ぬのは何故か迷信は今日神話時代のものでも澤山殘つてゐる。そうしてどういふ所に殘るかと云ふに、ロッス氏は其の看社會心理學に傳統的殘留の法則と云ふのがある、即ち傳統は如何なる所に殘留するかと云ふに近つき難き所に殘る、云ひ代へれば現はれたる所に亡んでも隱れたる所が、今山伏が來て祈禱最中に殘る表面に亡んでも裏面だからといふ、醫者が怒つに殘る都會にすたつても地方に殘る社會にすたつても家庭に殘る、陽に亡びて陰に殘る風俗にすたつても祭祀に殘る、御祭は昔からある御祭に火をつけるにマッチは恐れがあるとして舊式に燧石をつかう神や佛にマッチの火は恐れがあるとして、切火を用ゐる近頃は大部マッチを用ゐる樣になつたが、嚴肅の祭典にはマッチは用ゐぬ。それが又すたつてマッチを用ゐる樣になつたけれども、出雲の大社でも火杵火臼と云ふのがあつて、やはり摩擦によりて火を發せしめる、キリストでも佛教の儀式でも隨分古くから古い習慣をやつて居る、即ち社會にすたれてもある某家である彼の家は六人御祭には殘る。家庭に殘る表にすたれて裏に殘ると云ふのは事實である。社會的には合ひ性を云ふ人が無いるが今は病の身となつて病が、家庭には可なり根强く殘つてる、やれ火性と水性は惡るい、木性と火性もまついなどとどうも他の人が近付きにくい所に殘るのが傳統的殘留の法則だ。其のあげたのはこの家の長女正子さんである。

迷信の數々

迷信には中々奇拔な傳說があるから、拔載して見ようかと云ふに近つき難き所に殘る、云ひ代へれば現はれたる所に亡んでも隱れたる所が、今山伏が來て祈禱最中に殘る表面に亡んでも裏面だからといふ、醫者が怒つに殘る都會にすたつても地方に殘る社會にすたつても家庭に殘る、陽に亡びて陰に殘る風俗にすたつても祭祀に殘る、御祭は昔からある御祭に火をつけるにマッチは恐れがあるとして舊式に燧石をつかう神や佛にマッチの火は恐れがあるとして、切火を用ゐる近頃は大部マッチを用ゐる樣になつたが、嚴肅の祭典にはマッチは用ゐぬ。それが又すたつてマッチを用ゐる樣になつたけれども、出雲の大社でも火杵火臼と云ふのがあつて、やはり摩擦によりて火を發せしめる、キリストでも佛教の儀式でも隨分古くから古い習慣をやつて居る、即ち社會にすたれてもある某家である彼の家は六人御祭には殘る。家庭に殘る表にすたれて裏に殘ると云ふのは事實である。社會的には合ひ性を云ふ人が無いるが今は病の身となつて病が、家庭には可なり根强く殘つてる、やれ火性と水性は惡るい、木性と火性もまついなどとどうも他の人が近付きにくい所に殘るのが傳統的殘留の法則だ。其のあげたのはこの家の長女正子さんである。

けなげなる少女

時は春八々は歡樂のちまた火を發せしめる、キリストでも佛教の儀式でも隨分古くから古い習慣をやつて居る、即ち社會にすたれてもある某家である彼の家は六人御祭には殘る。家庭に殘る表にすたれて裏に殘ると云ふのは事實である。社會的には合ひ性を云ふ人が無いるが今は病の身となつて病が、家庭には可なり根强く殘つてる、やれ火性と水性は惡るい、木性と火性もまついなどとどうも他の人が近付きにくい所に殘るのが傳統的殘留の法則だ。其のあげたのはこの家の長女正子さんである。

日銀町の裏長屋にすんでゐる、即ち社會にすたれてもある某家である彼の家は六人の家内であるがその日〳〵の生計をたてゝ行く事が出來ない。父は大正燒屋であつて、やはり摩擦によりて火を發せしめる、キリストでも佛教の儀式でも隨分古くから古い習慣をやつて居る